

雪国に灯る「たいまつ」

下

戦後民主主義とミニコミ紙

ノンフィクション作家

三山 喬

ローカル紙『たいまつ』の軌跡をたどる旅のため、私が横手市を訪ねたのは三月の初旬。風物詩「かまくら祭り」は半月余り前に終わっていた。雪化粧は刈り田や山肌に薄っすら残るだけ。それでも南方に約三十キロ、山間地の湯沢市皆瀬地区まで分け入れば、まだまだうずたかく除雪による白い壁が続いていた。

むのたけじへの信頼

二〇〇五年の合併まで、この皆瀬は独立した村だった。小南三郎は九十四年の人生を、冬場の出稼ぎを除き、ずっとこの山村で送ってきた。昭和二十七（一九五二）年元日付『たいまつ』で再軍備反対論を発表し、

——戦争が終わって新しい世の中になる。そんな変革期とにかく知識をむさぼりたい。活字情報へのそんな渴望があったのではないですか。

「んだ、んだ。それはありました」

こうした情熱は何より若者に目立ったが、『たいまつ』は親世代の興味も引き、感覚にとくに世代間ギャップがあったわけではないという。

「ウチの父親は戦前の小作農。炭焼をしたり、蚕もやったりしてたども、生活は貧しくみじめなものだった。それが、戦後の農地開放で自作農になれたでしょう。だからそういう喜びや気負いとかは親子両方になりました」

元々この村に突出した大地主はおらず、小さな地主ばかりだった。農地開放でそれがさらに平準化された格好だが、それでも保守系の有力者は旧地主層が中心で、『たいまつ』を読むような小作農出身者とは毛色が違っていた。

当時の『たいまつ』には、農民作家・鶴田知也が提唱する『複合経営』つまり『酪農の勧め』がよく載った。しかし小南の話では、土地が狭い皆瀬への適用は難しく、むしろ近隣の羽後町に、酪農で成功する人が

論争を巻き起こしたあの農村青年である。

『たいまつ』との出会いなど細部はもう忘れたが、あのころの皆瀬には小南以外にも、郵便で届くこの小さな新聞を楽しみに待つ若者が大勢いたという。

「むのさんの思いや勢いが込められた紙面だったから、みな面白く感じたんだと思います。湯沢市や横手市では、定期的な読者の会合もあったみたいです。ただここから町に出るのは遠かったし、村内で読者同士つながりを持つこともとくにありませんでした」

それにしても、こんな『お堅いミニコミ』に、当時の農村青年はなぜ、かくも夢中になったのか。薪ストーブの傍らで返答に詰まる小南に、私は自分なりの想像を伝えてみた。

目立つようになったという。

いずれにせよ当時と現在では、農村をめぐる問題は一変した。

「私は昔、青年会幹部もやりました。秋田市の放送局に県北、秋田市の青年会代表と三人集められ、『農家の次男・三男問題』を討論した思い出もありますよ」

限られた農地に溢れかえる労働力をどうするか——。過疎や少子化の進行でもはや若者が見当たらない現在の農村では、想像もできない『ぜいたくな苦悩』だった。

「この辺りも年寄りのひとり暮らしとか老夫婦だけの家だとか、最近はそのようなばかりです。まさかこんな『未来』が来るなんて、あの時代は誰も考えていなかったでしょう」

小南は皆瀬村の村議を経て村長も一期務めている。保守系の現職に挑み続け、実に六回目の立候補でつかみ取った『村長の座』であった。

村政の課題に保革の対立を見ていたわけではない。「選挙には対抗馬が必要だ。とにかくその一点を訴え続けました」

地方政治を離れると、趣味で覚えたこけし作りのに